

書評・グリム童話(1)

—アメリカにおけるグリム・メルヒェン—

Eine Rezension > Grimms Märchen <. Erster Teil

- "Grimms' Fairy Tales" in Amerika -

小高康正

Yasumasa KOTAKA

最近、日本でアメリカのグリム・メルヒェン研究(以下、断りのない限り、グリム兄弟のメルヒェンを中心とする研究を簡単にグリム研究と呼ぶことにする)の翻訳が立て続けに出されている。これまでにルース・ボティックハイマーの『グリム童話の悪い少女と勇敢な少年』とマリア・タターの『グリム童話—その隠されたメッセージ』の二冊が出された。これらは、鈴木晶を中心とした何人か(メンバーは変わる)によってなされた仕事である。さらに、ジャック・ザイプスの『グリム兄弟』(仮)の翻訳も準備中とのことである。この著者の研究はすでに『赤頭巾ちゃんは森を抜けて』が別の訳者たちによって紹介されている⁽¹⁾。

これまでアメリカにおけるグリム研究が日本で紹介されることはあまりなかったので、ここにきて現代のアメリカの研究者の代表的な仕事が集まって紹介されたことは大きな意味を持っている。それも一般読者に向けて『グリム童話』の本格的な研究書が紹介されているというところに、現在の日本における、『グリム童話』の受容の仕方、更にはグリム研究の在り方に大きな変化を読み取ることができるのかも知れない。

こういう点について、以下、二回に分けて、これらの著作を中心にして、同時に、日本で最近出された他のグリム関係の本にも目をむけながら、考えてみたい。

(それぞれの著作からの引用は、邦訳をそのまま使用させていただき、本文内にそのページ数を記した。)

I.

先に挙げた著作は、それぞれ、ボティックハイマー(Ruth Bottigheimer, *Grimms' Bad Girls*

and *Bold Boys*)とタター(Maria Tatar, *The Hard Facts Of The Grimms' Fairy Tales*)の著作は1987年に、ザイプス(Jack Zipes, *The Trials & Tribulations Of Little Riding Hood*)は1983年に出されたものである。ザイプスのもう一つのまだ翻訳されていない方の著作(*The Brothers Grimm*)は1988年に出されている。

これらの著作が、アメリカで相次いで出されたのは1980年代に入ってからであり、ちょうどグリム兄弟の生誕二百年(1985年は兄ヤーコフ、翌1986年は弟ヴィルヘルム)の時期にあっていた。

この時期にアメリカでもうひとつ重要な本が出された。それはボティックハイマーの編集によって1986年に出版された論文集、『おとぎ話と社会—幻想・ほのめかし・規範』(*Fairy Tales and Society: Illusion, Allusion, and Paradigm*, ed. by R. B. Bottigheimer)である。1984年に米プリンストン大学で人類学、建築学、比較文学、英語・英文学、独語・独文学などの部門の学際的協力を得て催された学会で発表されたものを中心にまとめられている。そこに収録された19編の論文は、フォークロアとしての民話の語りに関する報告から『千夜一夜』を扱ったものまで多岐にわたっているが、そのうち直接グリム・メルヒェンを対象にしたものが5編含まれている。著者の名前だけを挙げると、タター、ボティックハイマー、ミュラー(Gerhard O. W. Mueller)、ザイプス、そしてレレケ(Heinz Rölleke)である。その後のアメリカでのグリム研究をリードしていった三人の研究者がすでに顔をそろえていたことになる。

そこに唯一のドイツの学者であるレレケが加わっていることもこの論文集の重要性を示している。レレケは言うまでもなく、グリム・メルヒェンの

テキスト校訂に関して最も重要な仕事をしている研究者であるが、その彼が寄稿した論文「〈マリーばあさん〉による〈きつすいのヘッセン人〉のメルヒェン—ある神話の終焉」(The "Utterly Hessian" Fairy Tales by "Old Marie": The End of a Myth, p.287-300)は現在のグリム研究に画期的な局面をもたらした記念碑的な研究である⁽²⁾。つまりそれまで、グリム兄弟の集めた話はドイツのヘッセン地方を中心とするものであり、話の提供者もその地方の農民であるという通念が受け入れられていた。しかし、上述のレレケの論文によって、グリム・メルヒェンの主だった語り手が十六世紀以来、フランスからドイツに移住したユグノーの子孫であることが明らかにされ、グリム童話の一つの「神話」が崩れたのであった。

十年近く前に発表されたレレケ論文がこうして並べて取り上げられていることは、レレケの仕事がその後のグリム研究に与えた影響の大きさを物語ると同時に、それがアメリカにおいていかなる方向に向かっているのかを知るいい機会でもある。

II.

文学研究者であるタタールは、その著『グリム童話—その隠されたメッセージ』でグリム論を展開するにあたって、「文学と民間伝承は、互いに混ざり合っているが、起源も意図も構造もすべて異なるのだ」(21ページ)と述べ、文学研究の手段がそのままでは使えないこと、民間伝承が境界のない分野であり、一面的な解釈を避けねばならないことから、「民俗学者が開発した方法、精神分析的評論家の洞察、そして歴史学者の持つ資料」(22ページ)を援用し、総合的にグリム・メルヒェンを見る立場をとったことを表明している。

タタールがこれら三つの分野から援用した研究とは、具体的にはプロップの民話の形態学であり、ベッテルハイムの心理学的(およびフロイトの精神分析的)解釈であり、ダーントンの歴史学的方法(あるいは資料)である⁽³⁾。

では、タタールはそれぞれの分野(方法論)から何を受け取り、どのようにグリム研究に援用したのかを見ておきたい。

タタールの研究の出発点には民間伝承(Folklore)と文学(Literatur)との違いを明瞭にして

おきたいという意図がある。この両者の理論的な区別を最初に提唱したのは1929年のヤコブソンとボガトウイリョフが共同で執筆した論文「創造の特殊な形態としてのフォークロア」(Die Folklore als eine besondere Form des Schaffens)であるが⁽⁴⁾、タタールの関心は、さらに具体的に「おとぎ話」(Fairy taleの訳。タタールは民話の中の空想性の強い物語をこう呼んでいる)がいかに画一的な、共通の構造をもっているか、そして、そのようなパターン化された構造を産み出している法(ルール)は何なのかに向けられた。そこで、「おとぎ話はその構造からみれば、すべてひとつの型に属する」(122ページ)ことを実証したプロップの『昔話の形態学』に注目した。周知のように、プロップはロシアの民話(魔法昔話)を分析し、そこに共通の構造を作り出している31の機能を取り出した。「プロップのいう機能とは、『話の筋にとって重要だという視点で取り出された登場人物の行為』のこと」(122ページ)である。またさらに、この31の機能が働く場として7つの行動領域を次のような登場人物に割り当てている。その7つとは、「1 悪者 2 恵みを与えるもの 3 助力者 4 王女 5 送り出す者 6 主人公 7 主人公のにせもの」(122ページ)である。

タタールは、その後の、グレマスやメレチンスキーらによるプロップ理論の修正を踏まえて、特に、主人公の役割に着目している。つまり、「主人公は他の全配役にたいしてその反対の位置におり、主人公以外の役割は主人公からの視点でのみ決まる。」これによって、必ずしも一対一で対応しているわけではない行動領域と登場人物の錯綜とした関係に「唯一の」純粋な役割を取り出すことができるのである。

このような視点をもって、タタールは「登場人物は主人公との関係でのみ性格づけられ、それぞれの立場が善か悪かにはっきり分れている。おとぎ話のめざすのは、話の中心にいるたったひとりの主人公が魔法の異質な世界を通るうちに、日常の現実の単調な世界のなかでの抑圧された状況から、まぶしい新しい現実へと浮上していくことだ。」(114ページ)と考える。

ところが、こういったおとぎ話の構造の画一性はどのように生じるのかという疑問が残る。それに

対して、タターは、「民話の心理的力学」の分析が必要であると考え、そのひとつとして、たとえばフロイトの「家族小説」という考え方を持ってきている。それは「ある種の神経症患者の心理から、想像の世界に生きている子どもたちの心の営みが洞察できる」(132ページ)というものであり、タターはそこから「子どもじみた空想が生み出す家族小説は、民衆の空想から生まれた、家族のおとぎ話にそなわっているテーマのおもな特徴を、そっくり写している」(133ページ)ことをグリムのいくつかの話の中に見ている。

また、「当時の農民生活と、民話のある部分が符合すること」を強調し⁶⁾、民話を歴史的資料とみなしたロバート・ダントンと同じように、タターは、おとぎ話の中にそれが作られ、語られた時代の社会制度が反映されている点も重視している。その時代とは、封建時代であり、「多くのおとぎ話の社会構造、制度、経済構造が、中世あるいは少なくとも近代以前の形態にもとづいたもの」(97ページ)であるととらえている。

しかし、歴史家ではないタターはそれをそのまま歴史的証言(事実)として取り出そうとするのではなく、「民話はずねに歴史的、文化的な現実の断片を含みもっているのだが、それらはしばしば超現実的な方向をとるテキストの中に埋めこまれてしまっている。」(108ページ)と考える。

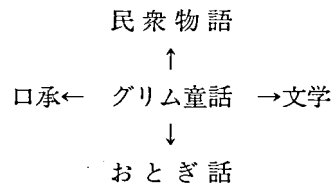
以上、タターがグリム論を展開するにあたり援用した理論や考え方をざっとみたわけだが、実はこのように個別に見ていたのではタターの研究の独自性がどこにあるのか見えてこない。いわば三つの色の光線が交わったところにかなる色彩が生まれ、それに照らし出されてグリム・メルヘンがどのように浮かび上がるのかを見なければならぬ。

タターにとって三つの光線はメルヘンのジャンル論で交わっているように見える。

タターはまずグリム童話を口承の民話とみなさず、「民話と文学とのぎこちない二重の生き方」(73ページ)をしている、つまり「民話から文学にまで広がる物語領域のうち、グリム童話はほぼまんやかに位置する。」(74ページ)と考えている。

このような見方は、グリム童話が口承の民話を忠実に記録したものではなく、グリム兄弟の手に

よって変更を加えられたテキストであるという見方が定着しつつあることによって、最近のグリム研究では特にめずらしいものではなくなってきている。しかし、たんに、グリム童話を、口承の民話でもなく、創作の文学でもないというように、消極的に位置づけるだけでは十分ではない。そこで、タターは、さらに、現実性の強い、写実的な物語のことを〈民衆物語〉(folk tale)と呼び、それと対照させて、空想性の強い、現実離れた、作り話の世界の物語のことを〈おとぎ話〉(fairy tale)と区別した(75ページ)。これによって次のような区分の図式が出来上がる(76ページ、図Cを参照して、筆者が作成)。



グリム童話を中心に円を描くと、この四つの四分円の中にグリム童話のさまざまな型のテキストがあてはめられる。例えば、口承のおとぎ話には、「白雪姫」(KHM53, Sneewittchen)、文学のおとぎ話には「ゆきしろとべにばら」(KHM161, Schneeweisschen und Rosenrot)、これは、シュタールの物語からとったものである⁶⁾。それに対して、「かしこい百姓娘」(KHM94, Die kluge Bauerntochter)などは口承の民衆物語に属し、「苦楽を共に」(KHM170, Lieb und Leid teilen)はやはり別のところからとってきた話であるので、文学的民衆物語ということになる。こうして、グリム童話は民衆物語とおとぎ話の両方を含み、民間伝承から文学まで網羅していると言われる。

こうしたタターのグリム童話にたいするジャンル論的な特徴づけは、これまで210編を含むグリム童話を無造作にひとまとめにして論ずるか、あるいは、ほんの一部分のみを取り出して全体の特徴とするような議論が多いなかで、個々の話の多様性を踏まえうえて、グリム童話全体をどのように位置づけるのかという困難な問題に対して、ひとつの新しい考え方を提示していると言えよう。

例えば、グリム童話に出てくる男の主人公は大

大きく二つのグループに分けられる。第一のグループは、最後には身分の低い者が王位につき、貧しい者が金持ちになる。その際、主人公の条件に「つつましき」が求められる。つつましい主人公のみが人物テストに合格し、援助者の力によって最後に幸福を手に入れることができる。このような主人公のグループはおとぎ話に見られるものである。

それに対して、第二のグループは民衆物語に見られるもので、「この一群の主人公の話には、王や王女は出てくるが、おとぎ話の持つ魔法的側面はなく、おかしみは土臭く、話の調子も現実的だ。主人公たちはたいてい職業につけるほどの年齢になっている。年季奉公をしている者が多いが、なかには、仕立て屋、森番、商人、雇われ兵もいる。」(160ページ)

このように二つの主人公のタイプはある程度「おとぎ話」「民衆物語」というジャンルの下位区分に対応する。その結果、「おとぎ話は、ひろく行きわたっている社会秩序（たいていはブルジョワの価値観で覆われた封建社会）を暗黙のうちに支持し、こうした社会秩序を支えるために求められる美德をすべて受け入れているが、民衆物語は、そうした社会秩序の神聖さを侵し、労働倫理を根底から覆している。」(199ページ)と言われる。

しかし、この区分、あるいはそれぞれの話が伝える「メッセージ」が相容れないものとして固定的に捉えられているのではないことは、「ルンペルシュティルツヒェン」(KHM55, Rumpelstilzchen)についての分析からも明らかである。

この話は、「魔法おとぎ話の糸紡ぎ肯定のイデオロギーと、滑稽民話の労働否定の価値体系とを結びつけた話」(199ページ)と見られ、「糸を紡ぐ三人の女」(KHM14, Die drei Spinnenrinnen)に現われるモチーフと細かく比較されることによって、「民衆物語のユーモアにどっぷりつかっていないながらもおかつ、おとぎ話の魔法をそのなかにも含んでいるのだ」(214ページ)と言われる。

また、このジャンルの区分の境界は時間的な変化をこうむることもある。例えば、「青ひげ」⁽⁷⁾の話で、女の好奇心がなぜ死に値するほどの罰を受けねばならないかが取り上げられている。青ひげの妻となった者は「この部屋を覗いてはならない！」という禁止をおかし、つぎつぎと残酷な殺

されかたをする。この青ひげの話はペローの場合、女の過度の好奇心をいましめる警告物語とされたが、グリム童話になると、最後に女主人公は知恵を働かせて危機を脱する点に力点がおかれるようになった。そこからタタールは、グリムの頃には「『青ひげ』がふたつの別々な物語—好奇心の危険性を警告するおとぎ話と賢い若い女性が冷酷な悪者に打ち勝つ民衆物語—に分れていた」(273ページ)と推測する。

このようにタタールによるグリム・メルヒェンのジャンル論の大きな特徴のひとつは口承と文学、おとぎ話と「民衆物語」というジャンルの座標軸の設定によって、グリム・メルヒェンの多様性を浮かび上がらせた点にあると言えよう。その際、タタールはこれらの口承と文学、おとぎ話と民衆物語とのあいだを流動的にとらえて、口承の話と文学的な話、民衆物語とおとぎ話の間のダイナミックな関係のなかに、グリムの話の特徴が見取れることに注意をうながしているのである。

だが、このタタールのジャンル論には『グリム童話集』に含まれる個々の話のタイプ区分とグリム童話全体の関係を考えようとするとき、ひとつの問題点が見えてくる。

タタールは、「民話から文学にまで広がる物語領域のうち、グリム童話はほぼまんやかに位置する。テキストのなかには民話のほうへ、あるいは文学のほうへ引っぱられているものもあるが、おおかたはその中間を占めている」(74ページ)と考え、「グリム童話は、混成のテキストという部類にはいるので、文学的民話と呼べるかもしれない」(75ページ)とも言っている。

このような定義の仕方は、民話と文学というジャンルの区別の重要性を強調しながらも、その境界線をあいまいにしてしまうことにならないであろうか。タタールは民話と文学の区別を、口承の話から文字で書かれたテキストにいたる連続する一本のグレースケールのようにイメージしているようである。しかし、言うまでもなく、口承の話と文字に定着されたテキストとは程度の差による区別ではなく、両者の本質的な違いによって根本的な境界線が引かれねばならない。この両者の理論的な区別を最初に提唱したのは、先に示したように、ヤコブソンとボガトウイリョフであるが、

そこでヤコブソンらはフォークロアの本質的な特徴として「フォークロア形成物そのものの存在は、やっとそれがある共同体によって受け入れられた後に始まり、そのうちこの共同体が自分のものにしたものだけが存在し続ける」という「共同体の前もっての検閲」(Präventivzensur der Gemeinschaft)という概念を提唱した。そして、ヤコブソンは両者がいくら絡み合い、素材が深くかかわりあっても、「口承詩と文学の根本的な境界線を消す権利はない」として、その違いを、構造主義言語学の概念である、〈ラング〉と〈パロール〉の関係によって説明したのであった⁶⁹⁾。

タートルはグリム童話を口承から文学に至るスケールの中に位置づけ、グリム童話の成立を、グリム兄弟の手によって、口承の民話が文字に書かれたテキストになったという点に見ている。

そしてヴィルヘルムの改作(Bearbeitung)についても、三つの段階でとらえられている。「第一段階は、兄弟の実際の手直しは入っていないが、結果的にふたりの聞いた話の中身が変更されただろうという段階だ。グリム兄弟が鋭い目をし、ペンを構えてその場にいるだけで、語り手の話ぶりに影響せずにはいなかったろう。第二段階は、積極的な手直し、すなわち話し言葉の語法を読むのに適した文学的言語に直す段階だ。だが話の輪郭やプロットの構成要素を変えるような大々的な手直しがあるのは、ようやく第三段階になってからだ。」(81ページ)

しかし、グリム童話の成立がこのように口承の民話から文字に書かれたテキストに至る、段階的変化ととらえることによって、口承と文学の根本的な境界線を消してしまうだけでなく、さらには『グリム童話集』の歴史的位置が明瞭に浮かび上がってこないのではないだろうか。

つまり、グリム童話を十九世紀に文字に書かれたテキスト、つまり文学作品『グリム童話集』として扱おうとするならば、口承の話との関係は、素材と作品の関係とみられるだろう。そして素材としての口承の話が、グリム兄弟の手によって、どのような文学作品になっていったかは、もとの話を想定するだけでなく、その当時の文学史との交流のなかで観察しなければならない。

このようにタートルの提示したジャンルの図式

はグリム・メルヒェンのひとつひとつの話とグリム童話全体との関係をどう見るかという点では少しあいまいな部分を残すとはいえ、グリム童話のジャンル論が、グリム兄弟自身による手直しと緊密につながっており、ひいてはグリム童話の成立をどのように評価するかという、いわばグリム童話の歴史性とも深くかかわってくることを示唆している。

III.

タートルはおもにジャンル論の面からグリム・メルヒェンを考察し、ヴィルヘルムによる手直し(Bearbeitung)によって「隠されたメッセージ」を明らかにしようとしたのに対して、ポティックハイマーは「『グリム童話集』は十九世紀のドイツにしっかりとその根をすえた歴史的な記録である」(11ページ)という前提に立って、グリム童話の道徳観や社会観を分析している。

分析の方法は、「モチーフ、テーマ、出来事が設定されている物語とテキストのコンテキストに焦点をあて」、「モチーフ間の類似性を相互に関連づける」(94ページ)やり方をとっている。その際、話を語っている言葉を綿密に調べ、特に話法の数量的な分析は、ポティックハイマーの主張に説得力のある裏付けを与えている。たとえば、ヴィルヘルムによる直接話法への書き換え(多用)を単に子供にわかりやすくするためといった修辞法上の問題として受けとめるのではなく、誰が言葉を発しているのかという面から見るとき、そこには、女性に対して沈黙を強いる価値観が現われていると解釈する。

本書でのポティックハイマーの一貫したねらいは『グリム童話集』に繰り返しあらわれるテーマのコンテキストや相互関係を調べることによって、グリム童話が読者に語っている社会観と道徳観を見定めようとするところにある(58ページ)。なかでもフェミニズムの立場から女性に対する性差別が論じられるところでは、ポティックハイマーのグリム論は批判的な色合いが強い。水と火という自然の力を取り上げた章では、水に象徴される女性の肯定的なイメージはどんどん弱められ、『十二人の兄弟』に登場するような自主性のある王女の姿は何度も修正され、その結果『六羽の白鳥』に

出てくる、無力な妹の姿となってしまった」(82ページ)と言われる。また、「マリアの子ども」の娘の処罰の苛酷さに見られるように、『グリム童話集』ではいたるところで娘と女は罰せられている、と言われる。

『グリム童話集』にあらわれた価値観が十九世紀ドイツの当時の社会的価値と道徳的価値を反映している、という見方は、先にとりあげたタタールのグリム論にも見られるものであるが、ポティックハイマーの特徴は特にグリム童話のもつ女性差別の問題を、個々の話の分析を通して具体的に取り出した点にあらう。ポティックハイマーはすでに1986年の『おとぎ話と社会』の「グリム童話における沈黙する女性たち」と題する論文で、おとぎ話というジャンルが一見無邪気で、無害なように見えるが、実際は女性は沈黙するものだという規範を伝え、強要する媒介となっていることを指摘していた⁹⁾。

ポティックハイマーはおとぎ話が十八世紀後半から十九世紀にかけて児童文学の領域に入っていく過程で『グリム童話集』の果たした役割に注目し、それをグリム兄弟の社会的意図と結びつけて考えている。「ヴィルヘルム・グリムの社会的意図は、童話集が次第にふくらんで、やがて規範的なものとされる二百話にまで達する間に、彼が書き加えたり、入れ換えたりしたところであらわれている。勤労、男女別に定められた役割、娘や女に対する概して処罰的な態度、社会の枠内での安定を第一と考える一貫した世界観、こういったものがヴィルヘルムが何年にもわたり童話集を改訂増補するうちに形成されていった」(52ページ)。つまり、「ヴィルヘルムは家父長的で保守的な社会を志向していた」(209ページ)と言われる。

口承の民話(Volksmärchen)をできるだけ忠実に再現した民話集を扱うときには、その民話集の個々の話のもっている価値観は、民話自体のもつ価値観として解釈することができ、読み手あるいは聞き手に対する影響や受容の問題も民話のテキストと同じやり方で扱うことができるが、編者の特定の意図が強く働いている場合には、それを口承のテキストと同じレベルで扱うことはできないのは言うまでもない。それで『グリム童話集』においても、最近ポティックハイマーのグリム論

にみられるように、特にヴィルヘルムによる編集のやり方に明確な教育的、社会的意図を読み取ろうとする傾向が強くなってきている。しかし、個々のテキストにおいてどこまでを民話の本来的な属性と見なし、どこからを編者の意図的な改変と見るかは容易なことではない。

ポティックハイマーはある出版社の『グリム童話集』の著作をめぐる訴訟問題を取り上げ、童話集は法的に兄弟のもののみなされるという訴訟状の立場に同意しながら、「この判断こそ、本書の出発点なのだ。」と述べ、「『子どもと家庭の童話』の内容をどのように考察する場合でも、ヴィルヘルム・グリムが、どれだけ、またどのようにテキストを改変したかについての正しい認識がなければならない」(33ページ)と、グリム童話を扱う際の基本的な作業のひとつとして強調している。

そしてポティックハイマーによれば、グリム童話は、「ヴィルヘルム・グリムが半世紀にもわたって休まず手を入れたことで、かつてないほど内的に一貫した価値観を備えた物語集となった」(39ページ)、つまり、「古くから人びとに語りつがれてきた民話を再定式化する際、ヴィルヘルム・グリムはおそらく知らず知らずのうちに一つのメッセージを話のなかに入れてしまったのだろう。もとの話が作り直されてきた方法と方向を解明してみると、ヴィルヘルムは家父長的で保守的な社会を志向していたということが明らかとなる」(209ページ)。

だが、ポティックハイマーが取り出してみせた、グリム童話のもつイデオロギー性を「古くから人びとに語りつがれてきた民話」には全く見られないとは言えないと同様に、ひとりヴィルヘルムの価値観に還元することもできないであろう。そこには口承の民話もっていたであろう価値観やメッセージに異なる意味を付け加えるコンテキストの変化があったのではないだろうか。つまり、グリム童話がもともとの口承の〈フォークロア〉の位相から〈文学〉のレベルへと入っていくことによって身につけたものがあつたであろう。

この点については、先にも述べたように、グリム童話をグリム兄弟の手によって作られた文学作品として扱うという前提から出発する場合、その前提は口承と文学をめぐるジャンルの問題に関わ

り、さらには文学史における位置づけを明確にすることによって検証されなければならないだろう。

しかし、ポティックハイマーにとっては、おとぎ話はジャンルの区分では、民話 (Volksmärchen) と文学的おとぎ話 (Kunstmärchen) を含むものであり、この間の区別は問題となっていないようである。

ザイプスもまた、十七世紀のペローから現代に至るまでの世界各地の「赤頭巾ちゃん」の再話やパロディを取り上げ、その変遷を辿った『赤頭巾ちゃんは森を抜けて』(原題を忠実に訳せば、「赤頭巾ちゃんの試練と苦難」の意) では、ペローやグリムなどの再話を〈文学的おとぎ話〉として、口承の話から厳しく区別し、それらが生まれた時代の背景を考察している。その結果、これらの文学的再話には当時のイデオロギーがたっぷり含まれていると考えた。

グリムの「赤ずきん」(KHM26, Rotkäppchen) について、ザイプスは次のように述べている。「明らかに、かつての口承の物語は、性的欲望や森の中の実際的な危険について語りかけるあけすけな話であった。それが、グリムが『赤帽子ちゃん』を文明化し、洗練し終わった頃には、性と肉体に理性を従わせるためのコード化されたメッセージに変わっていた。」(30ページ) つまり、ザイプスにとっては、「『赤頭巾』の文学上の変遷は、西欧社会における性の社会化の発展に対応している。」(44ページ) と解釈される。

ところが、ポティックハイマー編の『おとぎ話と社会』に収められたザイプスの論文「グリム兄弟と、おとぎ話に対するドイツの好み」(The Grimms and the German Obsession with Fairy Tales, p.271-285) ではドイツにおいておとぎ話が特に好まれる理由を、おとぎ話という「制度としてのジャンル」(the genre as Institution) の面から見ることを提案している⁹⁹。

(こたか やすまさ 助教授)

(1991. 5. 1 受理)

注

(1) 『グリム童話の悪い少女と勇敢な少年』(鈴木晶、田中京子、広川郁子、横山子訳 紀伊国屋書店、1990年)、『グリム童話—その隠されたメッセージ』(鈴

木晶、高野真知子、山根玲子、吉岡智恵子訳 新曜社、1990年)、『赤頭巾ちゃんは森を抜けて』(廉岡糸子、横川寿美子、吉田純子、阿吽社、1990年)

(2) この論文のドイツ語原題と初出は次の通り。

Die stockhessischen, Märchen der Alten Marie : Das Ende eines Mythos um die frühesten KHM - Aufzeichnungen der Brüder Grimm, in Germanisch - Romanische Monatshefte NF25, S.74-86, 1975.

邦訳は、『現代に生きるグリム』(谷口幸男他著 岩波書店 1985年、259—285ページ)にあるが、訳者が明記されておらず、最も重要な番号表(268ページ)に不正確なところがある。

(3) これらについては、それぞれウラジーミル・プロップ著『昔話の形態学』(北岡誠司他訳 白馬書房 1983年)、ブルーノ・ベッテルハイム著『昔話の魔力』(波多野完治他訳 評論社 1978年)、ロバート・ダントーン「農民は民話をとおして告げ口する」(ダントーン著『猫の大虐殺』(海保真夫他訳 岩波書店 1990年、3—110ページ)の邦訳がある。

(4) 『ロマン・ヤーコブソン選集3』(川本茂雄編 大修館書店 1985年、12—26ページ) 参照

(5) ダントーン 51ページ 参照

(6) グリム童話の話は、通常、原題 (Kinder - und Hausmärchen) の頭文字 (KHM) をとり、通し番号を付けてよんでいる。

(7) 「青ひげ」(Blaubart) は初版では取り上げられたが、はっきりとペローの話に由来していることがわかり、第二版以後は削除された。

(8) 『ヤーコブソン選集3』(13—21ページ)

(9) Fairy Tales and Society, p.130.

(10) The Grimms and the German Obsession with Fairy Tales, p.275.